

図22 各標識群の尾叉長の変化 各群の下段は8/29・84, 上段は12/27・84(実験開始後120日目)の尾叉長。 ※の下段は10/1・84で上段はほかの群と同じ。

VI ハマフエフキ天然幼稚魚の生態調査

ハマフエフキの幼魚期の生態については、沖縄島南部海域での沖縄水試(1975a), 金城ら(1983)の調査や羽地海域での当才から1才の天然魚を用いた標識放流調査(海老沢・山本, 1983)がある。また浮遊生活期については、フエフキダイ科仔稚魚の種の同定が困難なためにハマフエフキそのものについての知見はないが、フエフキダイ科魚類としての浮遊生活期についての金城(1983)の調査がある。

しかしながら、着底前後から定置網などで漁獲される以前の稚魚期から幼魚期前半までの生態については、断片的な事実に基づく推測にとどまっている。これは、沖縄の沿岸海域ではサンゴ礁がよく発達しているので、底曳き網や吾智網などによる幼稚魚の定量採集が困難なことから、従来採集によ

って得られた資料から生態を研究しようという姿勢が強く、採集調査に固執したために十分な資料が得られず、結局推測の範囲を越せなかったと考えられる。そのため今回は採集調査を補足的にして、主に潜水観察による調査を行った。

ここでは潜水観察による調査によって得られた結果に、追込み網（渡辺，1983）や底曳き網などによる採集調査の結果を補足して、ハマフエフキ幼魚の分布と生活場所の変化について述べる。

また着底以前の稚魚を採集する試みとして水中灯採集を行ったので、その結果の概要についても触れる。

1 潜水観察調査

(1) 方法

羽地内海に2本、羽地外海に6本の350m～1,000mの潜水観察側線を設けて（図23），その側線上をSCUBA潜水しながら、線の両側でみられるフエフキダイ属幼魚を側線10m単位ごとに計数して記録した。また底質についても適宜記録した。側線の両側の観察幅は、潮時、天候、場所などによって海水の透視度に良・不良があるためにいつも一定ではなかった。側線I-1, 0-1, 2の深部で1m以下であったり、0-4の岸寄り部分で時化などによって3～4mになったこともあったが、それ以外は6～8mの観察幅であった。側線の潜水観察の総延長距離は17,730m、総時間は24時間であった（表6）。

なお6月から8月の間は、継続調査の側線を選定するための予備調査として、I-1, 2, 0-1～6の8側線で潜水観察した。9月以降は月1～2回の頻度で、0-4の1側線だけを観察した。また6月の観察では個体数を計数しなかった。

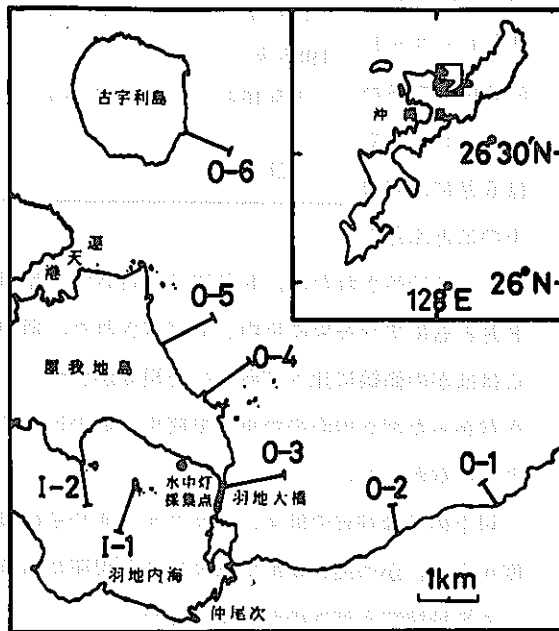


図23 ハマフエフキ幼魚の分布調査のための潜水観察側線と水中灯採集点（黒丸）

今回の観察結果の図には、ハマフエフキ、イトフエフキと、小さかったり速く泳ぎ去ったために種が同定できなかったフエフキダイ属幼魚だけを示し、それ以外のフエフキダイ属幼魚は示さなかった。

なお調査は2月以降も継続している。